

ひいおばあちゃんと私

小 六

私の家にひいおばあちゃんがとまりに来たときのことです。ひいおばあちゃんとみんなで出かけました。ひいおばあちゃんは足が不自由で、とてもゆっくり歩くので、私も妹も思いつきり遊ばせませんでした。心の中で、「もう少し速く歩くことはできないのかな。あんまり遊ばなくていやだな。」と帰りの車の中でずっと考えていました。すると、ひいおばあちゃんが、「何年生なの。」と聞いてきました。だから、私はていねいに、「もう五年生になったよ。」

と答えました。でも数分たつと、「何年生なの。」

とまた聞いてきました。最初は「もう九十才だから忘れっぽくなってくるのかな。」と思っていました。でも、これが何回も続きました。私もだんだん、「めんどろくさい。もう、うるさい。」という気持ちになりました。ついには言葉に出して、

「もう何回も同じことを言っているよ、おばあちゃん。」

と強く当たってしまいました。

次の日、学校の総合的な学習の時間に、認知症について勉強しました。先生が、ビデオなどを使って、認知症について話をしてくれました。私は、認知症についてくわしく知ったのは初めてでした。おじいちゃん、おばあちゃんぐらいになっ

てくると、忘れっぽくなり、同じことを何回も聞くようになる、でも同じことを何回言われても、ていねいに、やさしく接することが大切。きつい言葉を言って、強く当たってしまったと、落ちこんで、ますます同じことを言うことが多くなってしまう、ということがありました。私は、認知症になった人はとても不安だろうなと思いました。すると、ひいおばあちゃんのことですぐに頭にうかんできました。「おばあちゃんも、今ごろ落ちこんでいるかな。だいじょうぶかな。」と心配になりました。

学校が終わり、家に帰るとひいおばあちゃんが、

「お帰り。」

と言いました。すると今度は、勉強をしているのに、ずっと私にいろいろな話を

してきます。心の中で、「うるさい、静かにして。」と思い、その気持ちを口に出してしまいそうになったとき、今日の授業で教わった「どんなときでも、ていねいに、やさしく接する。」と言われた言葉がうかんできました。口から出てきそうな言葉をおさえて、

「うんうん、そうなの。」

とできるだけやさしく接しました。そうしているうちに、話しかけられても、やさしく対応することができるようになりました。それどころか、ひいおばあちゃんといっしょに絵をかいて、

「上手だね。」

「ここは、どの色でぬればいいかな。」

など、たくさんのお話をできるようになりました。

私は、相手の気持ちを思い、やさしく、

ていねいに接することにより、小さい子
からお年寄りまで仲よく、楽しく生活で
きるのだと思います。